学校づくりの一員として
oneofthem3
続日々の雑記帳　№11　２００５．６．20　by　ｙｏｓｈｉｋｉ

危うい子どもたちと向き合って

「子どもというのはほんとにえたいがしれない。」

そんな思いが続いています。

もう一歩でみんなの中に入れる、と言うところまで来て、その一歩が踏み出せないでいる三年のｙ君。

放課後、Ｇ先生と個別に学習しているときは、素直に学習に取り組めるのに、学級集団の中に入ったら、学習をかき乱すようなことばかりする五年のＴ君。

際限なく私語を続け、注意すれば悪態をつく二年のＨ君。

（何でやねん？他の子はちゃんとやってるのに……。）と思い惑うばかりで、次の手がなかなか見えないのはほんとにしんどいです。

以前にも書きましたが、私も泥沼から抜け出せない一年がありました。

教師になって七年目。担任としてそれなりにやっていける手応えを感じていた頃でした。豊郷小へ赴任していきなり六年生を持ちました。困難校であり、その六年生にも指導の難しい子どもたちが何人もいました。

でも、一学期は結構うまく行ったのです。先輩に教えてもらいながら授業も、合唱指導なども今までとは画然と違うものが生み出せたりしたのです。課題のある子どもたちとも結構うまくつながれていました。

おかしくなったのは二学期からでした。

二学期の運動会練習。学年で動くことが多くなりました。隣の学級は豊小の実践のリーダーだったＷ先生。子どもたちの質の違いは歴然としていました。何をやっても自分の学級の子どもたちのアラばかり見えてしまうのです。（何とか学年として足並みをそろえなければ）というあせりが、子どもたちへの注意・叱責の連続になりました。言えば聞いてくれると思ったのです。しかし、そういう私のありように対して子どもたちはどんどん離れて行きました。もともと、このクラスのボス的存在だった子が露骨に反発するようになりました。女子は女子で、冷ややかな目で見るようになり、軽い冗談にも本気で怒り出すというような状況になってしまいました。そして、おとなしい子は沈黙していきました。

どう立て直したらいいのか分からず、沈み込んでいく私に対して先輩の先生たちはいろんなアドバイスをしてくれました。でも、言われたようにうまくできるはずもなく、余裕も気力もなくなっていきました。胃など痛くなったことのない私ですがキリキリと傷むようにもなりました。

一旦切れた関係は修復できないまま、三学期に入って更に状況は悪くなりました。卒業式の練習にもさぼって出ない子が出るようになりました。

（もうあと○日で卒業式や）と、このクラスから離れられる日を指折り数えて待つようになりました。当然のことながら何の感慨もない卒業式を終えて、その一年が終わりました。

しばらくは、その子たちを許せない気持ちでいっぱいでした。しかし、少し時間が立ち、客観的に自分を振り返る余裕が出てきたとき、（非は自分の側にあったのかもしれない）と思うようになりました。

すばらしい合唱や学習をつくっていく隣の学級に対してねたましさやうらやましさを感じていた子どもたち。そんな子らに「おまえらがあかんのや」と責めたのですから、逆に（おまえの教え方が悪いんやろが！）と子どもたちが反発してくるのは当然のことだったのです。

この学級の子どもたちとの出会いが教師としての私の原点になっています。

「外のものさしで子どもを見ないようにしよう。」

「子どもといっしょに歩いていこう。そしてほんの小さな成功を一緒に喜び合おう」

そんなことを意識するようになって、授業は下手でも子どもとずれることは少なくなりました。

「悪いところを指摘してよくしようとしても決してうまくいかない。よいところをほめれば悪いところが消える。」

辻先生の言葉です。